

令和5年度病虫害発生予報第7号の発表について

このことについて、次のとおり発表したので送付します。

《予報の概要》

作物名	病虫害名	予想発生量
カンキツ	貯蔵病害（緑かび病、青かび病） ミカンハダニ	並 やや多
カキ	炭疽病	やや多
果樹の 共通害虫	カメムシ類	やや多
キャベツ	黒腐病 べと病 アブラムシ類 コナジラミ類 モンシロチョウ	並 並 やや多 やや多 並
ブロッコリー	黒腐病 べと病 アブラムシ類 コナジラミ類 モンシロチョウ	やや少 並 やや多 並 並
青ネギ	軟腐病 疫病 ネギハモグリバエ ネギアザミウマ	並 並 並 やや多
イチゴ (施設本圃)	うどんこ病 炭疽病 アブラムシ類 コナジラミ類 ハダニ類	並 やや多 やや多 やや多 やや多

作物名	病虫害名	予想発生量
ニンジン	黒葉枯病 萎黄病 ハモグリバエ類	やや少 やや多 やや多
アスパラガス（施設栽培）	褐斑病 ネギアザミウマ ハダニ類 アブラムシ類	やや多 やや多 やや多 やや多
露地キク	白さび病 アブラムシ類 アザミウマ類 ハダニ類	やや少 やや多 並 並
野菜、花きの 共通害虫	ハスモンヨトウ シロイチモジヨトウ コナガ類 タバコガ類（タバコガ、オオタバコガ）	やや多 やや多 やや多 並

太文字の病虫害：向こう1か月の間、発生状況に特に注意を要する病虫害を示す。

* 予報根拠中の記号

(+)：発生量を多くする要因

(-)：発生量を少なくする要因

(±)：発生量が平年並になる要因

令和5年度 病害虫発生予報 第7号(10月)

A. 果樹の病害虫

－カンキツ－

1. 貯蔵病害(緑かび病、青かび病)

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

根 拠 (1) 一般圃場での9月下旬の発生は認めなかった(－)が、裂果が見られる果実がやや多く、日焼け果も一部地域でやや多かった(+)。

(2) 10月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 収穫10～30日前に薬剤防除を行う。

(2) 収穫、選果、運搬時には果実に傷をつけないように注意する。貯蔵する前には必ず予措を行うとともに、貯蔵中は貯蔵庫内の温湿度管理に十分配慮する。

2. ミカンハダニ

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

根 拠 (1) 一般圃場での9月下旬の発生量は平年並であった。(±)

(2) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。

対 策 (1) 秋期のミカンハダニの果実寄生は品質の低下につながるのので、寄生を認めれば速やかに薬剤防除を行う。

(2) 薬剤散布に当たっては、散布むらのないよう丁寧に行う。

(3) 薬剤抵抗性の発達を回避するため、同一成分を含む農薬の使用は年1回とする。

－カ キー

1. 炭疽病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

根 拠 (1) 一般圃場での9月下旬の発生量は平年並であった。(±)

(2) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。

対 策 (1) 薬剤防除はかけむらのないよう丁寧に散布し、降雨が続く場合は、降雨の合間に散布する。

(2) 圃場内をよく観察して、発病果実や発病枝は見つけしだい除去し、圃場外に持ち出すなど適切に処分する。前年に発生が確認された圃場では特に注意する。

(3) すでに収穫が始まっている品種もあることから、薬剤防除の際には収穫前日数及び使用回数に注意する。

－果樹の共通害虫－

1. カメムシ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**(令和5年度9月27日付け調査速報第5号発表)

根 拠 (1) 9月の県予察圃場予察灯の誘殺数は多かった。(+)

(2) 9月の綾歌郡綾川町の予察灯の誘殺数は平年並であったが(±)、ツヤアオカメムシの誘殺数は多かった(+)。

(3) 一般圃場の9月下旬の発生量はカンキツでは認めなかったが(－)、カキ

ではやや少なかった（－）。

(4) 防除員報告では、発生量のやや多い地区があった。（＋）

- 対 策 (1) カンキツ類は、着色前の果実でも吸汁されると果実内部が褐変し、落果するため注意する
- (2) 圃場内をよく観察し、被害果実やカメムシ類の発生が見られる場合は、早急に薬剤散布を実施する。特にスギ、ヒノキ等が周辺に多い圃場や、過去に被害が認められた圃場では注意する。
- (3) 多発してからの薬剤散布では防除効果が劣るので、発生初期の散布を徹底する。
- (4) 成虫は夕方に飛来し夜間加害するので、薬剤散布は夕方に広域かつ一斉に行うと効果的である。
- (5) 黄色蛍光灯は、チャバネアオカメムシには忌避効果があるが、ほかのカメムシには効果がないので注意する。
- (6) 防除薬剤は、香川県監修の果樹病虫害防除暦を参考にする。

B. 野菜、花きの病虫害

－キャベツ－

1. 黒腐病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

- 根 拠 (1) 9月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。（±）
(2) 10月の気象は降水量が平年並の予報である。（±）

- 対 策 (1) 薬剤防除は予防的に7～10日間隔で行う。曇雨天が続くような場合に発病を認めたら適宜防除する。害虫の食害痕等からも病原菌が侵入するので害虫防除を徹底する。
- (2) すでに発生している圃場ではオキシリニック酸やカスガマイシンを含む薬剤を散布する。
- (3) 台風など大雨や強風の後には感染が助長されるので、早めに薬剤防除を行う。

2. ベと病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

- 根 拠 (1) 9月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。（±）
(2) 10月の気象は降水量が平年並の予報である。（±）

- 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素過多にならないよう肥培管理する。
- (2) 薬剤防除は予防的に実施し、初期感染を防ぐことによって散布回数を減らすよう努める。
- (3) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. アブラムシ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

- 根 拠 (1) 9月下旬の発生量は平年並であった。（±）
(2) 綾歌郡綾川町の黄色水盤での9月のアブラムシ類の誘殺数は多かった。（＋）
(3) 10月の気象は気温が高く（＋）、降水量が平年並の（±）予報である。

- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
- (2) 育苗期から生育初期に粒剤等を施用する。

(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

4. コナジラミ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

根 拠 (1) 9月下旬の発生量は多かった。(+)
(2) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並の(±)予報である。

対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(2) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

5. モンシロチョウ

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

根 拠 (1) 9月下旬の発生は認めなかった。(－)
(2) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。

対 策 (1) 苗床は防虫ネットで被覆し、成虫の侵入防止対策を講じる。
(2) 定植時に灌注処理や粒剤を施用するとともに発生初期から薬剤防除を行う。

－ブロッコリー－

1. 黒腐病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少

根 拠 (1) 9月下旬の年内どりブロッコリーでの発生は認めなかった。(－)
(2) 10月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 薬剤防除は予防的に7～10日間隔で行う。曇雨天が続くような場合に発病を認めたら適宜防除する。害虫の食害痕等からも病原菌が侵入するので害虫防除を徹底する。
(2) すでに発生している圃場ではオキシリニック酸やカスガマイシンを含む薬剤を散布する。
(3) 台風など大雨や強風の後には感染が助長されるので、早めに薬剤防除を行う。

2. ベと病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

根 拠 (1) 9月下旬の年内どりブロッコリーでの発生は平年と同様に認めなかった。(±)

(2) 10月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素過多にならないよう肥培管理する。
(2) 薬剤防除は予防的に実施し、初期感染を防ぐことによって散布回数を減らすよう努める。
(3) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. アブラムシ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

- 根 拠 (1) 9月下旬の発生量は平年並であった。(±)
 (2) 綾歌郡綾川町の黄色水盤での9月のアブラムシ類の誘殺数は多かった。
 (+)
 (3) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並の(±)予報である。
- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
 (2) 育苗期から生育初期に粒剤等を施用する。
 (3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

4. コナジラミ類

- 予 想 発生地域： 県内全域
 発生量： 並
- 根 拠 (1) 9月下旬の発生は認めなかった。(－)
 (2) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並の(±)予報である。
- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
 (2) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

5. モンシロチョウ

- 予 想 発生地域： 県内全域
 発生量： 並
- 根 拠 (1) 9月下旬の発生量はやや少なかった。(－)
 (2) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。
- 対 策 (1) 苗床は防虫ネットで被覆し、成虫の侵入防止対策を講じる。
 (2) 定植時に灌注処理や粒剤を施用するとともに発生初期から薬剤防除を行う。

－青ネギー

1. 軟腐病

- 予 想 発生地域： 県内全域
 発生量： 並
- 根 拠 (1) 9月下旬の発生量はやや少なかった。(－)
 (2) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並の(±)予報である。
- 対 策 (1) 発生の多い圃場では菌密度が高くなっているため、圃場をかえるか土壌消毒を実施する。
 (2) 窒素肥料の過不足がないよう肥培管理する。
 (3) 圃場の排水を良くし、水を長期間停滞させないようにする。
 (4) 薬剤防除は予防的に7～10日間隔で行う。

2. 疫病

- 予 想 発生地域： 県内全域
 発生量： 並
- 根 拠 (1) 9月下旬の発生量はやや少なかった。(－)
 (2) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並の(±)予報である。
- 対 策 (1) 圃場の排水を良くし、水を長期間停滞させないようにする。
 (2) 発生の多い圃場では菌密度が高くなっているため、圃場を変えるか土壌消毒を実施する。
 (3) 薬剤防除は予防的に7～10日間隔で行う。
 (4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. ネギハモグリバエ

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

根 拠 (1) 9月下旬の発生量はやや少なかった。(－)
(2) 10月の気象は気温が高い予報である。(＋)

対 策 (1) 防虫ネットを張るなどして、侵入防止対策を講じる。
(2) 摘葉した残さや、収穫終了後の茎葉は次作の発生源になるので、土中に埋めるか、古ビニール等で被覆するなど適切に処分する。
(3) 多発してからの防除は困難であるので、発生兆しが見られたら早めに防除する。
(4) 定植時には育苗トレイ灌注または粒剤施用をする。

4. ネギアザミウマ

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

根 拠 (1) 9月下旬の発生量はやや多かった。(＋)
(2) 10月の気象は気温が高く(＋)、降水量が平年並の(±)予報である。

対 策 (1) ネギアザミウマの吸汁により、ウイルス病(ネギえそ条斑病等)が媒介される場合や食害痕から病原菌が侵入する場合がありますので、食害が認められる場合は早期に防除を行う。
(2) 防除後も表土中の蛹や葉肉内の卵が新たに羽化、孵化する場合がありますので、多発圃場では7～10日間隔で防除を行う。
(3) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(4) 抵抗性発達回避のため、同一系統薬剤を連用しない。

－イチゴ(施設本圃)－

1. うどんこ病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

根 拠 9月下旬の発生量は平年並であった。(±)

対 策 (1) 薬剤散布は発生初期から5～7日間隔で行う。
(2) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. 炭疽病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

根 拠 (1) 9月下旬の発生量はやや多かった。(＋)
(2) 10月の気象は気温が高い予報である。(＋)

対 策 (1) 発病株は見つけしだい除去し圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(2) 水滴の飛散等で伝染するので、発病が見られる圃場では、灌水の跳ね返り等がないように注意する。
(3) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。
(4) 予防剤を定期的に散布し、発生が見られたら治療効果のある薬剤を散布する。
(5) ベンゾイミダゾール系剤、Q o I 剤に対して耐性菌が確認されているので注意する。

3. アブラムシ類

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**
- 根 拠 (1) 9月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 綾歌郡綾川町の黄色水盤での9月のアブラムシ類の誘殺数は多かった。
(+)
(3) 10月の気象は気温が高い予報である。(+)
- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(2) 茎葉が繁茂していると薬剤が十分に到達しにくい場合があるので、丁寧に散布する。
(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

4. コナジラミ類

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**
- 根 拠 (1) 9月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 10月の気象は気温が高い予報である。(+)
- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(2) 一部の薬剤に対して抵抗性の発達が認められるので、作用性の異なる薬剤で防除する。

5. ハダニ類

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**
- 根 拠 (1) 9月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 10月の気象は気温が高い予報である。(+)
- 対 策 (1) 人による持ち込みを回避するため、発生圃場に入った着衣のまま未発生圃場に立ち入らない。
(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(3) 発生が局所的な場合には、気門封鎖剤のスポット散布を行う。
(4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

ーニンジンー

1. 黒葉枯病

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少
- 根 拠 (1) 9月下旬の発生は認めなかった。(－)
(2) 10月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 肥料切れに注意し、株の勢いが衰えないように栽培管理する。
(2) 薬剤防除は予防的に実施し、初期感染を防ぐことによって散布回数を減らすよう努める。

2. 萎黄病

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**
- 根 拠 (1) 9月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) ニンジンでのヒメフタテンヨコバイの9月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(3) 綾歌郡綾川町の予察灯でのヒメフタテンヨコバイの8月の誘殺数は多かつ

た。(+))

- 対 策 (1) 発病株は早期に抜き取り、適正に処分する。
(2) 近隣に休耕田や雑草地がある圃場では、アブラムシ類やヒメフタテンヨコバイの発生が多くなるので、アブラムシ類防除を徹底し、ヒメフタテンヨコバイの発生を少なくする。

3. ハモグリバエ類

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**
- 根 拠 (1) 9月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 10月の気象は気温が高い予報である。(+))
- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(2) 摘葉した残さや収穫終了後の茎葉は発生源になるので、圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(3) 多発してからの防除は困難であるので、発生の兆しが見られたら早めに防除する。
(4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

－アスパラガス（施設栽培）－

1. 褐斑病

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**
- 根 拠 (1) 9月下旬の発生量はやや多かった。(+))
(2) 10月の気象は気温が高い予報である。(+))
- 対 策 (1) 過繁茂にならないよう、茎葉の刈込みや適切な肥培管理を行う。
(2) 刈り取った被害茎葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(3) 発生前から予防的に薬剤散布を行う。

2. ネギアザミウマ

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**
- 根 拠 (1) 9月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 防除員報告では発生量がやや多い地区があった。(+))
(3) 10月の気象は気温が高い予報である。(+))
- 対 策 (1) 施設の開口部を防虫ネットで被覆する、光反射資材を施設周縁部に敷設するなどして、侵入防止対策を講じる。
(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(3) 圃場内の数か所で成茎の擬葉が繁茂しているところを手で払って、10×20cm程の板上に1か所当たり1～5頭の成虫を認めたら防除する。
(4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. ハダニ類

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**
- 根 拠 (1) 9月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 防除員報告では発生量がやや多い地区があった。(+))
(3) 10月の気象は気温が高い予報である。(+))
- 対 策 (1) 人による持ち込みを回避するため、発生圃場に入った着衣のまま未発生圃場に立ち入らない。

- (2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
- (3) 発生が局所的な場合には、スポット散布を行う。
- (4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

4. アブラムシ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

- 根 拠 (1) 9月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 綾歌郡綾川町の黄色水盤での9月のアブラムシ類の誘殺数は多かった。
(+)

- (3) 10月の気象は気温が高い予報である。(+)

対 策 (1) 施設の開口部を防虫ネットで被覆し、光反射資材を施設周縁部に敷設する
などして、侵入防止対策を講じる。
(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統薬剤を連用しない。

ー露地キクー

1. 白さび病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少

- 根 拠 (1) 9月下旬の発生は小ギク、輪ギクともに認めなかった。(－)
(2) 10月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 窒素質肥料の過不足がないよう肥培管理をする。
(2) 薬剤防除は予防的に実施し、発生量が増加した場合は、治療効果のある薬剤を散布する。
(3) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. アブラムシ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

- 根 拠 (1) 9月下旬の発生は小ギクでは平年と同様に認めず(±)、輪ギクでは認め
なかった(－)。
(2) 綾歌郡綾川町の黄色水盤での9月のアブラムシ類の誘殺数は多かった。
(+)

- (3) 10月の気象が高く(+)、降水量が平年並の(±)予報である。

対 策 (1) 施設の開口部を防虫ネットで被覆し、光反射資材を施設周縁部に敷設する
などして、侵入防止対策を講じる。
(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。

3. アザミウマ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

- 根 拠 (1) 9月下旬の発生は小ギクでは認めず(－)、輪ギクではやや少なかった
(－)。
(2) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並の(±)予報である。

- 対 策 (1) 葉にわずかなカスリ状の食害痕が見られる場合に防除する。
(2) 防除後も表土中の蛹や葉肉内の卵が新たに羽化、孵化する場合もあるの
で、多発圃場では7～10日間隔で防除を行う。
(3) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。

- (4) 抵抗性発達回避のため、同一系統薬剤を連用しない。

4. ハダニ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

根 拠 (1) 9月下旬の発生は小ギクでは発生を認めず(－)、輪ギクでは平年並(±)であった。

(2) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並の(±)予報である。

対 策 (1) 人による持ち込みを回避するため、発生圃場に入った着衣のまま未発生圃場に立ち入らない。

(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。

(3) 発生が局所的な場合には、スポット散布を行う。

(4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

－野菜、花きの共通害虫－

1. ハスモンヨトウ

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

根 拠 (1) 9月下旬の発生量は、キャベツでは発生を認めず(－)、ニンジンではやや多く(+)、ブロッコリーでは平年並(±)であった。また、一部地域の野菜類で発生量がやや多かった。(＋)

(2) 防除員報告ではキュウリ、イチゴ、キャベツ、ブロッコリーで発生量の多い地区があった。(＋)

(3) フェロモントラップでの9月の誘殺数はやや少なかった。(－)

(4) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並の(±)予報である。

対 策 (1) 若齢幼虫は集団で食害するため、被害葉は表皮だけを残して白色になっているので、本圃の果菜類等ではこれらを発見したら摘葉するとともに薬剤防除を行う。

(2) 施設の出入口やサイド換気口等の開口部に防虫ネットを張り、侵入を防止する。

(3) 中老齢幼虫には薬剤の効果が劣るので、体長1 cm以下の若齢幼虫期に薬剤防除を行う。

(4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. シロイチモジヨトウ

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

根 拠 (1) 9月下旬の青ネギ、ブロッコリーでの発生量は平年並であった。(±)

(2) 綾歌郡綾川町のフェロモントラップでの9月の誘殺数はやや少なかった。(－)

(3) 防除員報告では青ネギ、キャベツにおいて発生量がやや多い地区があった。(＋)

(4) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並の(±)予報である。

対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。

(2) 施設の出入口やサイド換気口等の開口部に防虫ネットを張り、侵入を防止する。

(3) 中老齢幼虫には薬剤の効果が劣るので、体長1 cm以下の若齢幼虫期に薬剤防除を行う。

(4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. コナガ

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： **やや多**

根 拠 (1) 9月下旬の発生はキャベツでは平年と同様に認めず(±)、ブロッコリーではやや多かった(+).

(2) 綾歌郡綾川町のフェロモントラップでの9月の誘殺数はやや少なかった。(－)

(3) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。

対 策 (1) 苗床は防虫ネットで被覆し、成虫の侵入防止対策を講じる。

(2) 定植時に灌注処理や粒剤を施用するとともに発生初期から薬剤防除を行う。

(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

4. タバコガ類 (タバコガ、オオタバコガ)

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： 並

根 拠 (1) 9月下旬の発生は秋キュウリではやや少なかった。(－)

(2) 綾歌郡綾川町のフェロモントラップでの9月のタバコガ類の誘殺数はやや多かった。(＋)

(3) 防除員報告では、丸亀市飯山町のフェロモントラップでのオオタバコガの誘殺数はやや少なかった。(－)

(4) 10月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並の(±)予報である。

対 策 (1) 施設の出入口やサイド換気口等の開口部に防虫ネットを張り、侵入を防止する。

(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。

(3) 花蕾や生長点を食害するので被害が見えたら直ちに薬剤防除を行う。

(4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

農薬はラベルをよく読んで使用しましょう

病害虫防除所インターネットホームページ

URL: <https://www.pref.kagawa.lg.jp/byogaichuboj/index.html>



近隣農地の作物等や住宅地等での農薬飛散防止の注意が必要です。
風の状況を確認し、飛散の恐れがあるときは散布作業を中止しましょう